
約束 ~ The past that forgot ~

ぽろぽろ蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束　　The past that forgot

【Nコード】

N2369U

【作者名】

ぼろぼろ蜜柑

【あらすじ】

この小説は妄想ので出来ています。三次元とはまったく関係の無い二次元です。設定：APH、ヘタリアの世界が舞台。ある日会議が行われようとしていた主催国の日本（本田菊）がいなくなる。最初は誰も日本がいなくなった事に気づかないのだが、集合時間を過ぎても会議場へ来ない日本を不思議に思ったイタリア（フェリアーノ・ヴァルガス）達は、会議を中断し日本を探し始める。日本の携帯や家の電話に掛けてみても出ることは無く、日本の身に何か危ない事が起きたのではないかと涙ぐむイタリア。各々様々な想

いで日本を探す中、イギリス（アーサー・カークランド）は一人、他の国達とは違う場所へと向かっていた・・・。

軽く詳細（前書き）

ヘタリアは万人受けするものではない漫画なのでヘタリアを知らない、もしくは嫌い苦手という方はご遠慮願います。

軽く詳細

約束「The past that forgot」は「忘れた過去」という意味です。某笑顔動画でRPGとしてupしたかったのですがそこまでの技術は無く・・・orz

国語は好きでも上手ではないので皆さんのお気に召すかはわかりませんがよろしく願います。

時代背景としては20xx年の春頃。

桜がまだ蕾の頃と想像していただければ分かりやすいと思います。

ちなみに私は日本、つまり本田菊がヘタリアの中で一番好きです。一番大好きです。大事なことなので2回言いました。

軽く詳細（後書き）

まだまだひよっこですが、よろしく願いします。

人物設定（前書き）

小説の重要人物を中心にのせています。
性格は原作を軸にある程度脚色もしています。

人物設定

プロフィール

名前：日本 本田菊

性格：日本の化身であるせいか謙虚で物静か、はつきり物は言えな
いが遺憾の意を

発動したら

八橋に包まれず赤福状態になる。

東洋の英国と呼ばれ真面目で堅物かと思えば、実はオタクで

アニメ漫画好き

という一面も持つ。

仲の良い人にはたまに毒舌のもよう。

塩分が大好きでドイツによく注意される。

一度これを決めたら意地でも曲げない頑固なところがある。

名前：イタリア（北） - フェリシアーノ・ヴァルガス

性格：イタリアの化身であるせいか可愛い女の子好き、ピッツアと
パスタも好き。

怒ることは滅多に無くむしろ怒られる側にいる。

泣き虫ですぐ泣いちゃう。でもその分優しい心の持ち主。

絵を描くことが好きでたまに日本の絵の色塗りを頼まれるこ
とがある。

本人はあまりよく分かってないらしいが、

イタリアいわく「日本ってやっぱり変わってるよね」らしい。

名前：イギリス アーサー・カークランド

性格：英国紳士と呼ばれるほどジェントルマンだが、本当の正体は変態紳士。

料理は壊滅的なのに本人はそれに気づいていないという残念な人。

昔はぐれていた時期もあつたが今は大人しい。だが偶にタガが外れる場合も

ある。（酒とか酒とか酒のせいで

人には見えないものが見えるということで、イギリスによれば弟が独立されたこと有。

「ばかあ！」が口癖のツンデレ。日本が大好き（ベーコンレタスではなく元同盟という意味で）。

イギリスいわく「べ、別に好きとかじゃなくてお互い島国で

気m（ry

ツンデレhshs）

甘ー甘*）

名前：ドイツ ルートヴィッヒ・バイルシュミット

性格：ドイツの化身のせいか、物凄く真面目で規律正しい。時間通りに動かないと

気がすまない。

イタリアとは性格が正反対と言っていいくらいなのに、世話好きらしい

ドイツはいつもイタリアと一緒に。

そのせいか苦勞が絶え間ない。

イタリアの靴紐を（ry、イタリアに水を（ry、イタリアに・・・。

真面目すぎるせいかたまに天然ちゃんになる。

日本とは胃薬仲間として一緒にお茶会をする。（プロイセン

目撃談）

ドイツいわく「あいつの方は、はけ口があるから随分マシ」らしい。

名前：アメリカ アルフレッド・F・ジョーンズ

性格：元気。アメリカの化身どうこう関係なくとても元気。ただし落ち込んだ時の

落胆ぶりはすさまじい。

曲がったことが大嫌いでヒーローが大好き。

自分自身もヒーローだと思っている。

空気を読まない発言が多く、その場の空気を壊すことが多い。皆からはKYといわれるが、噂では本当はAKY等では？と囁かれている。

イギリスの見える見えないものは信じないが、見えるもの（トニー）は信じる性格。

日本のアニメ、漫画やゲームが大好き。

アメリカいわく「日本の文化は本当にCoolだね！」らしい

名前：フランス フランシス・ボヌフォア

性格：イギリスと同じくらい紳士的（特に美人には男女関係なく）。しかにそれは

本人の前では禁句である。

料理がとても上手で知り合いや仲の良い人に振舞うの好き。

某眉毛が作る料理に対し、食材が可哀想だからやめて！を何千回も言い続け

ているほど腐れ縁。

でも何だかんだ言いながら最近はずいぶん昔よりも仲が良い方向へと向かっている。

悪友が2人おり、たまにその3人で集会をする。話の中心になるのはもっぱら

イタリア兄弟。

日本とは二次元繋がりで良い関係を築いている。

フランスいわく「芸術にジャンルは関係ないのさ」らしい。

名前：不明

性格：謎。

存在自体がまだまだ謎な人物。

その正体がわかるのはいつの日か・・・。

名前：桜&梅

性格：日本が大好き。

それ以外は謎のまま。

その正体がわかる（ry

人物設定（後書き）

今は9人ですが、小説がある程度進んだら他に登場人物のプロフィールをのせていこうと思います。

0 プロローグ（前書き）

始まりです。

0 プロローグ

「菊さまー！見てくださいこれ、とても可愛らしい花が咲いていますよー！」

懐かしい、声がする。

「もう桜ってばいつも先に行っちゃう！菊さまも呆れちゃってるよ？」

「梅ってばいつもそういうんだから。菊さまは元気がいい子が好きだって言うてくださったもの。呆れてなんかいないんだから！そうですよね、菊さま？」

まだ幼い少女が、私に話しかけてくる。

「いいえ！今のは絶対呆れた顔だった！昨日だって一人で先に走って行っちゃって、こけちゃったじゃない。忘れたとは言わせないよ？」

「あ、あれは仕方なかったの！急にうさぎさんが飛び出してきたんだもの！しょうがなもん……。」

桜と呼ばれていた子が少し悔しそうにうつむいてそういう。

知らない子のはずなのにふと、この子らしい。と気持ち
が暖かくなるのを感じた。

「だったら最初から走らなければよかったの！いつまで経っても子供なんだから。」

「子供じゃないもん！そういう梅だつて　姉さまが久しぶりに会いにくるって聞いた途端にすごく大喜びして、子供み
たいだった。」

いま、何姉さまと言ったのだろうか？

名前の部分がぼやけたように、ノイズがかかったように聞こえない。

「わたしはいいの！桜みたいに転ぶこともなかったし。それに姉さまには何年も会ってなかったから……。桜だって本当は姉さまに会える事をすごく喜んでるって知ってるんだから！」

話によるとその姉さまとやらは、この少女達にとっても大切な人のようだ。

私はその人のことを知っているのだから・・・？

「それはわたしだって嬉しいよ？でも久しぶりに会えて嬉しい！って喜んでる梅は絶対子供みたいだった！」

「！！！！ そんなの普段から子供の桜には言われたくない、

「桜も梅も、もうそろそろ口喧嘩はおやめなさい。 さんが
きた時に悲しまれますよ？」

どこからか喧嘩を制止する声が聞こえる。これは、私の
声？

「うう……。ごめんなさい菊さま……。」

「わたしもごめんなさい……。」

そう素直に謝ってくる子供達の頭に、私は自然と手を伸ばしていた。

この子達は本当にいつも素直で・・・。

・・・・・・今のは夢？

気がついたら周りは真っ暗で、うつすらと見えるのは木目のついた

天井だった。

どっちが現実だろう、いつも見慣れているはずの天井が知らない天井に見えた。

いったいさっきに夢はなんだったのだろうか。

今でもこの手にあの子達に頭を触った感触が残っている。

夢の中では私と知り合いのように話をしていたが、まった見覚えが無かった。

でもなんだろう、心の中にぽっかりと穴が空いたようなこの気持ち
は？

何か大事なものを無くした時のような消失感。

日本として生きてきた長い年月、そういった気持ちは何度も味わってきた。

そしてその度に自分を奮い立たせ心の隙間を埋めてきたのだ。

時間はかかるにせよ日本、本田菊はいつもそうしてきた。

今回は原因が分かっているが、分かっていないという不思議な気分を味わっている。

先ほどの夢をよく思い出そうとする、2人の少女と名前が分からない姉さま。

いったい何者なのだろうか？

しかし考えれば考えるほど、眠気を感じまぶたが重くなっていく。

別にどうでもいいことのはずなのに・・・気になるあの存在。

だが菊はすでに次の夢へと誘われていた。

菊様

なぜ忘れてしまったのです

約束、したじゃないですか

忘れてしまったなんて酷いです

ワタシ約束守らない人は嫌い

でも菊様だから嫌いになんてなれない

だから無理やりにも約束守らせて頂きますよ？

いいですね？菊様・・・

0 プロローグ（後書き）

菊いろいろと忘れていきます。

1・始まりは（前書き）

イタリアサイドです。

1・始まりは

「ヴえー！遅刻しちゃうよー！！！」

現在2時30分、会議が始まるのは2時。

イタリアは完全に遅刻をしていた。

遅刻常習犯の彼だが、最近は遅刻することもなかったのだが今日は久しぶりに遅刻をした。

（ドイツに怒られちゃうよ・・・！！！！急いで会議場に行かないと！！）

スーツ姿で走っているイタリアは、人の目を惹きつけていた。

会議場があるのは日本。そこで外国人がスーツで走っているのは異様な光景に周りの人には見えた。

しかし走ってるその青年は美形で不審者などを見る目などはしていなかった。

人々は「眼福だなあ」とか「あの外国人の人すっごい綺麗なんだけど！」とか「どこの国の人なんだろう」と様々の思いを口に出していた。

そしてその中でも「いいわねあの男」や「あの方と是非お話してみたい！」という女性がイタリアを狙っていたのだ。

普段なら彼女たちが狙う前に彼が狙うのだが、今はそんな時間はない。

「遅刻をしているのをわかっていたのにナンパしました。」

なんて言ったら確実にドイツの雷が落ちる。
心の中ではあの子可愛いなあ、なんてちゃっかり思っているのだが・
・・。

必死で走って約5分。イタリアは会議場となるビルの一室の前に来ていた。

乱れていた息とネクタイと整える。

だが心臓はまだバクバクと音を立てている。

（ここまで来たのはいいけど・・・、やっぱり入るのは怖いよ！！
！）

遅刻をした時点でわかっていた事なのだけど、やはり怖いようだ。

勇気を振り絞ってドアノブにそつと手をかける。

きつと他のみんなはとくに会議場に来ているはずだ。どんな反応をされるだろう？きつと怒られるか呆れられるんだろうなあ、想像しながらガチャとドアを開けた。

「みんな遅刻してごめんなさい！」

がばつと音が聞こえるような勢いで日本直伝の90度お辞儀をした。日本が「これをすれば大体のことは大丈夫ですよ。」なんて言っていたことを思い出しながらイタリアはゆっくり顔を上げていった。

ドイツが物凄い迫力でイタリアの方へと向かってきていた。

「ぎやああああああああ！！ごめんなさいごめんなさい！！もう二度と遅刻しないからそんな顔しないでええええええええええ！！！」

びっくりした彼は泣き叫びながらそう叫んでいた。

（あれは絶対に怒ってるよ……。どうしようなんて言ったら許してくれるだろう？）

とうとうドイツが目の前まで来てガシッとイタリアの肩を掴む。

ぎゅつと目を瞑つて怒鳴り声が来る衝撃に備える。しかし来ると思つていた衝撃は来ず、そつと目を開けてドイツの顔を伺つて見る。その顔は想像していた表情とは違い困つたような、焦つた様な様子だつた。

どうしたんだらうとイタリアが聞く前にドイツが口を開いた。

「日本と一緒にじゃないのか？」

日本と一緒に？どうしてそんなことを聞くのだろう。日本はとっくに来ているじゃないの？

そう言うドイツは日本はまだ来ていないとそう返した。

「そうか・・・、イタリアと一緒に来るのかと思ったんだがな・・・」

少し落胆したようにそう呟いた。

後ろの方にいたみんなも同じような様子だった。

「あれ？日本は一緒にじゃないのかい？」

「日本がこの時間になっても会議場にいないなんて、珍しいこともあるんだ。」

中を見回してみるが日本の姿はない。本当にまだ来ていないようだ。

「日本のケータイや家の方に電話しても出なかったある、きつとなにか危ないことに巻き込まれたあるよ！」

「なに不吉な事言っただよばかあ！」

日本が電話に出ないなんて。そういう時は原稿締め切り前やアニメを見ている時だけなのに・・・。

みんなの話によるとこういうことらしい。

最初にこの会場に来たのはドイツで、いつもならとっくに来ている

はずの日本が見えないことに少し驚いたが、日本の事だから何か事情があつたに違いないと思つたそうだ。

その後に来たイギリスも同じ事を思つたようで驚いた顔をしたけど、「ああ、もしかしたらあれの事か？」と言つて自己完結したらしい。続々と会議場に国達が集まる中とうとう予定の時間になり席に着いたけど、肝心の主催国の日本がいない状況にみんなはかなり驚いたらしい。

イタリアならまだしも、日本が遅刻をすることは滅多にない。あつたとしても必ず前もつて会議に遅れるとい連絡を誰かにいれるのだ。しかし今回はその連絡もなく、メールさえなかったのだ。誰かが「もしかしたらイタリア迎えにいったんじゃないのか？」と言つた事で、そうかもしれない。とい話になつたのだが、どうしてそうなたかというと実は前日にみんなで集まつて飲み会をしていたからだ。イタリアは普段はお酒の席では早々とお酒に潰れて寝てしまつらしいのだが、その日だけは珍しく遅くまで起きていた。

「そのままじゃ明日寝坊してしまいますよ？」

なんて言つていたので、日本が主催国として迎えに行つたのだと思つたのだ。

日本なら有り得るだろうとイタリアも思つた。

だけど実際にイタリアが来て見れば日本は一緒にいなかった。

それを見て焦つたドイツがイタリアに詰め寄つた、ということだつた。

「ヴえ、日本どうしちゃつたんだろう？」

「・・・さあな、俺はわからない。しかしこのままじゃ会議にならないぞ？主催国がいらないんだからな。ドイツどうする？今回の会議の復任は確かお前だったよな？」

「それはいいかもしれないねー？このままど時間の無駄だし。」

みんなは一斉にドイツの方へと顔を向ける。

「そ、そうだな・・・。では今回は会議をいったん中止する。その代わり日本を探しに行こうと思うのだが。」

「賛成賛成！おれもそれがいいと思うよー！」

「俺ももちろん賛成さ！日本の身になにかあったかもしれないなんて知ったら、助けに行くのは当たり前だろう？HEROだからね！」

続々と賛成の声が上がってくる。やはりみんなも日本を心配していたようで彼の身を安じる声が多かった。

「よし。反対意見もないようだから日本を搜索することで決定だな。」

1・始まりは（後書き）

力つきました・・・。

途中まで書いたところでPCがフリーズしてしまったため、当初の内容とは少し違っていきます。

さて日本はいつたいたくなったのか、わかる人にはきつとわかるかもしれませんね。

2・菊を探し隊（前書き）

2話ですね。

投稿遅くなり申し訳ございませんでしたorz

2・菊を探し隊

「日本が行きそうな場所はこれでいいんだな？」

会議室の中央。みんなに見えるように置いてあったホワイトボードには、日本がよく行く店の名前や場所が書かれていた。

日本の家はもちろん、近所の公園や行きつけの商店街、アニメ関連のグッズが置いてある店の名前などだ。付き合いも長く日本と仲のよかった同盟国2人はもちろん、他の国達もどこへよく行くかは知っていたので案外早く揃った。

「さて、誰かどこへ行くかだが面倒だからこのホワイトボードに自分の名前を書いていってくれ。オレは余ったところへ行く。」

話し合いで決まった「菊を探し隊」のメンバーが続々とホワイトボードへ名前を書いていった。

全員で行くと大変なことになるので、居残り組として何人かが連絡係として会議室となったビルで待っていることになっている。

それぞれが自分の役目を果たすために、いつもの会議の何倍もの真

剣な表情をしていた。

それをドイツは苦い顔で、いつもこんな風に会議が進めばいいと内心溜息をつきながら眺めていた。

「ドイツー、行きつけの場所に誰が行くが決まったよ！ちなみにドイツはおれと日本の家に行くことになったから、よろしくねー！」

キリリとしたやる気満々の顔でイタリアがそう言った。
そんな様子を見てドイツの兄であるプロイセンはによにとした顔で見つめていたが、ドイツは見えていないことにした。

「さあ、誰が行くかも決まったことだしさっさと行くんだぞ！日本にもしものことがあつたら大変だからね！！！」

「落ち着けアメリカ、そう焦つてると上手くいく事も失敗するぞ。
ここはもつと冷静に行動するべきだろ？」

「あー、イギリスの意見と同じなのは癪つめだけど賛成だ。アメリカはもつと冷静になれ。」

あの犬猿の仲の二人の意見が合うのは珍しいことでアメリカは吃驚した。文句でも言いたかったが、揉め事を起こしてはいけな**い**と思**い**そこは素直に従った。

周りも驚いてはいるがいがそれぞれではない様で、連絡用に使う携帯について話していた。

「連絡用には携帯電話を使う。プライベート用だけでいいかもしれないが、一応仕事用の携帯電話も持っておいた方がいい。なにかあった時のためにな。」

「わかったある。プライベート用を主に使えばいいあるね？」

「ケセセ！携帯の充電もばっちりだから何時間でも通話できるぜ！」

自信満々にプロイセンが笑っているのを見て、誰もがそこは自慢するところか？と心の中で突っ込んでいた。

「けどもし携帯の電池が切れたらどうするんだこのやろー。」

「それなら大丈夫やと思うでー？日本やと携帯用の充電器がコンビニとかの店で簡単に手に入るゆうつたし、そうそう困ることはないと思うわあ。」

少しぶりぶりして言うイタリアの兄の南イタリア、ロマーノに安心させるようにスペインは頭をぽんぽんと撫でる。それのおかげかロマーノの機嫌はだいぶよくなったようだ。

携帯の充電の心配も解決し、準備もほぼ整った。後は日本を探すだけだ。

時計の方を見てみると、針は10時半を指している。

そろそろ行くかとドイツが言い出立が決まった。

ずっと日本を探すために時間を使うことができないので、夕方5時にまたここで集合することを決めて国達は日本探しへと旅立つていく。

最後の一人がボタンとドアを閉め、部屋を出ていった。

静寂が部屋全体を包み込む。誰も一言も喋れない様子だ。

このまま静寂が続くのかと思った時、誰かが呟いた。

「お腹空いたし。なんか食べ物ないん？」

「……えええええ！？こんな時になに悠長なこと言ってるんだよポーランド！！」

「だって腹が減ってはなんちゃらららって日本がこの前教えてくれたんよ！こういう時は空腹を満たすのが大事だと思うし！」

シリアスだった雰囲気思い切りぶち壊したポーランド。

朝は会議に緊張をして、朝食をあまり食べられなかったと言っていた。

「ふふふ。実はわたくしも少しお腹が空いていました・・・。」

照れたようにリヒテンシュタインが答える。

「ほら！リヒテンもこう言ってるんやし、マジで何か食べた方がよくない？」

キラキラした目で訴えかけるポーランドに、しょうがないなあもう・・・と呆れるリトアニア。しかしあのピリピリした雰囲気が消えたことで、場が和んだことには安心した。

他の国達もそう思ったようで表情には笑顔が戻っていた。

そしてスイスやベラルーシもお腹が空いていると言ったことをきっかけに、間食を取る事になった。

会議室の電話を使って間食用の料理を頼むのだが、その役目は当たり前のようリトアニアに任される。

日本の消息が掴めず不安な思いをしているのは変わらないが、今はこの和やかな空気をみんなで楽しんでいた。

日本はすぐに見つかると思じて・・・。

> b r <
> b r <
> b r <
> b r <
> b r <
> b r <
> b r <
> b r <
> b r <
> b r <
> b r <
> b r <
> b r <

2・菊を探し隊（後書き）

2話が出来上がるまで数時間かかりました。

キャラクターの口調に違和感があるかもしれません。

方言も難しいですorz

そして文章もあまり調子が出ませんでしたorz

そして日本搜索ですが、3話から「菊を探し隊」が活躍します。多分。

いったい誰がメンバーに選ばれたのか、お楽しみに^^

3・菊の行方(1)(前書き)

名前についての呼び方ですが、国名で呼ぶのは仕事内だけ。

プライベートなことになると人名を使います。

なのでこれからはほとんど人名で、国名はたまにしか出で来なくなります。

ただいきなり人名からだとは分かりづらいと思うので、名前が出たばかりの人は国名・人名という形にします。

3・菊の行方（1）

日本、つまり本田菊の家の近くにある公園に、ロシアのイヴァン・ブラギンスキとプロイセンのギルベルト・バイルシュミットが菊の姿が無いか探していた。

この2人が一緒になることは滅多に見られない。珍しい組み合わせになった理由が「公園に行きたかった」だった。お互い国として過去色々あったりはしたが、今はけっこう仲がいいらしい。

昼前なせいか、親子連れの姿は見かけられない。
そして菊の姿も・・・。

公園は小さい子供から大きな子供まで、楽しく遊べるように出来ていた。

砂場やブランコ、シーソーにジャングルジム。どれも子供たちが安全に遊べるように工夫されたいる。

「さすが菊んとこだな。細かいところまで気を使っなんてアイツらしいぜ。ケセセ！」

公園で起きる悲しい事故が元で遊具が無くなっていくことがあるこの国で、菊は子供達の楽しみを守る為に「安全に遊べる公園」をモットーに政府に働きかけていたのだ。

その成果が少しずつ実り始めているのである。

あと何年かすれば完全には言えないけど、親も安心して子供を遊ばせることができる公園が全国に広がっていくだろう。

2人は近くにあったベンチへ腰をかけた。

「確かに公園の遊具もいいけど桜も綺麗だよねえ。今はまだ蕾みただけど、もうしばらくしたら綺麗に咲くんだろうね？きっと。」

周りにはソメイヨシノの木が何本も植えられている。イヴァンの言うようにまだ蕾だったけど今にも花開きそうだ。

日本の西側では既に桜が咲いているところもあり、満開になっているところもあるのだが関東や中部などの東側はまだだった。

毎年この季節に咲く花。

菊と並ぶ、この国の国花だ。

菊は毎年国達と一緒に花見会を催している。

その人数は年々増え、今ではほとんどの国が参加してくるまでに人数が膨れ上がった。

「少ない人数で楽しむ花見もいいですが、大勢で楽しみのもいいものですね。」が最近の菊の口癖だ。

そんな菊に感化され、桜の魅力にとりつかれた国が何人もいた。

イヴァンもその中の一人で、毎年桜が咲くのを楽しみにしている。

「ああ、きっと綺麗だろうな。今年はいつともより綺麗な桜が見れるでしょうって、今朝のニュースでもやってたしな！」

止まっていたホテルのテレビでたまたま見たニュースで、それをやっていたらしい。
花の咲く予報を天気ニュースで紹介するなんて珍しいよな、なんて笑いながら言う。

「本当だね。菊くんのところは見ていて飽きないねー。」

ニコニコと純粋な笑顔でそう返事するイヴァン。
いつになく穏やかな空気が流れている。

その間にギルベルトはもう一回公園内を詮索してみる。しかし菊の姿は見えず会議室で待っている仲間の元へ報告の電話をかけた。

公園には温かい風が一筋、吹き抜けていた。

> b r <

> b r <

> b r <

> b r <

> > > > >
b b b b b
r r r r r
< < < < <

3・菊の行方（1）（後書き）

菊の行方は短めに、その場所によって1話ずつの話です。
今回はスラスラと書けました。

皆さんに読みやすい、面白いと少しでも思ってもらえれば幸いです
^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2369u/>

約束 ~ The past that forgot ~

2011年10月8日19時13分発行